第７回連載コラム（第１話）

相談役　辻田満

第７回目となる連載コラムは第４話シリーズにわたって「スクエアダンス愛好者の高齢化対応」について書きます。第 1 話では「はじめに」、「我が国のスクエアダンスの歩み」、「愛好者の高齢化への対応調査結果」についてです。

１．はじめに

一般に「高齢化」と言えば全体の中で高齢者の割合が高まっていくことを指していますが、スクエアダンスは年齢にはあまりこだわることなく本人が元気であれば幾つになっても楽しめるレクリエーションなので、今までは「高齢化」と言う言葉はなじみの薄い言葉でした。しかしながら今スクエアダンス界に押し寄せる「高齢化」がとんでもない危機をもたらそうとしているのです。ここでの「愛好者の高齢化対応」は単に「高齢者を対象としたスクエアダンスの指導」について取り上げたテーマではなく、これからのスクエアダンス界の存亡がかかった大変重要なテーマとして取り上げるものです。

２．我が国のスクエアダンスの歩み

1946 年（昭和 21 年）12 月長崎で進駐軍民間教育担当官の W.P 二ブロ氏によって初めて日本にスクエアダンスが紹介されました。これは日本におけるスクエアダンスの幕開けであると同時に日本におけるフォークダンスの幕開けでもありました。

1961 年（昭和 36 年）9 月極東米軍 SD CALLERS 協会第2回アニバーサリーが開催され 1962 年（昭和 37 年）9 月には東京スクエアダンス指導者協会（東京コーラーズ）が設立されました。1966 年（昭和 41 年）6 月日本スクエアダンス指導者連絡協議会が設立され、1980 年（昭和 55 年）4 月日本スクエアダンス協会が設立され昭和 57 年に三笠宮崇仁親王殿下を総裁にお迎えしました。

日本スクエアダンス協会の設立された 1980 年の加盟団体数は 103 団体、会員数は 2195 名（女性 1110 名、男性 1085 名）でした。当時の大多数の愛好者の年齢構成は 20 歳代、30 歳代の若者でした。それから 40 年近くが経過し、2016（平成 29）年度末現在、加盟団体は 534 団体、会員数は 14,498 名（女性 12,216 名、男性 2,282 名）となっていますが、この愛好者の増加も 2005 年（平成 17 年）から会員の増

加率は低下し、2013（平成25）年から3年間はマイナス成長となってしまいました。また、現在の愛好者の年齢構成は60歳代、70歳代となってしまっています。

３．愛好者の高齢化への対応調査結果

2017年7月に日本スクエアダンス協会で実施しました愛好者の高齢化への対応調査の集計結果はすでに2017年のS協機関紙9月号で会員の皆様にお知らせをしておりますが、この結果をみて皆さんはどのようにお感じになられたでしょうか？

私が強く感じたことは下記の４点です。

① 10年前の愛好者の大多数の年齢構成はほぼ50歳代、60歳代でした。60歳以上が45％で、内6％が70歳以上でした。それから10年が経過し現在は大多数の愛好者の年齢構成はほぼ60歳代、70歳代となっております。70歳以上が49％で内6％が80歳以上となっています。時間と共に確実に愛好者の年齢構成は高齢化に推移しています。この年齢構成の推移から10年後の愛好者年齢構成を予測すると確実に愛好者の大多数は70歳代、80歳代になり、このまま何も手を打たなければおそらくこの時期から愛好者の激減期に突入することが容易に予測されます。

② 現在の愛好者の半数が70歳代以上であっても彼らの大多数は50歳代60歳代からの10年以上のキャリアがある愛好者であり何の問題もなくPLUS以上を踊って楽しんでいます。したがって多くのクラブではとくに高齢化に配慮したプログラムは必要なく、また今回の調査に対してもなんでS協は70歳代を高齢者扱いをする必要があるのかとの意見が多くみられ、最大の問題である10年後に来るであろう厳しい現実（愛好者の大多数が70歳代、80歳代になること）に対して問題意識が極めて薄いということです。

③ この素晴らしいスクエアダンスを次世代に繋げていく私達に残された最後の時間はこれからの10年間と言っても過言ではありません。また、この重大事をS協組織だけにお任せするのではなく各クラブ単位で真剣に考え行動を起こさなければなりません。

④ また、アンケートの記述には「初心者講習会は年齢制限をすべきである」とか「自分の年齢を考えるとスクエアダンスを楽しめる時間を初心者講習会に奪われたくない」との意見を平然と書かれていることには驚くばかりです。

（次号に続く）

第７回連載コラム（第２話）

相談役　辻田満

第７回目となる連載コラムは第４話シリーズにわたって「スクエアダンス愛好者の高齢化対応」について書きます。第 2 話では「アメリカのフォークダンス事情」についてです。

（次号に続く）

４．アメリカのフォークダンス事情

今から 26 年前の 1992 年に来日したカリフォルニア FD 協会元会長のジョン・フィルチチ氏の「アメリカにおける高齢者のフォークダンス事情」と題した講演記録が私の手元にあります。ジョン氏はこの講演ですでに 26 年後、すなわち現在の日本のフォークダンス事情を予測していたのです。この講演記録はフォークダンスをスクエアダンスに置き換えて読み取れる内容なのです。

以下はジョン氏の講演内容の一部です。

① 1940 年代から 50 年代にはダンサーは全て 20 歳代から 30 歳代で 40 歳代の人も多少いました。フォークダンス運動がこのようにしてどんどん盛んになって、1950 年代 60 年代を超えて 1970 年でその最高潮に達しました。これは 20 歳代の、開拓者精神をもって始めた指導者がずっと続けてダンスをしていたからです。その時に何故人がいっぱいきたかというと、フォークダンスで男女が会えて楽しく踊れたということで、大変多くの人が入ってきたということです。たくさん集まった若い男女はそこで会って結婚をし、そこで新しい家庭を作っていきました。

② 1970 年以降社会が多様化し、スポーツの種類が増えたりテレビが盛んになったりしたのと同時に、アメリカ人がお金持ちになり、いろいろなことにそれを使うようになったことに関連があります。簡単に言うと年をとった人はだんだんと踊れなくなって離れていくのに、その減っていくのをうめるだけの若い人を入れるのに失敗したということです。それは年をとった人達が今 70 歳、80 歳になっているのに、今もその人達が指導をして連盟を動かしているのが原因です。若者があるときこんなことをいいました。もうフォークダンスなんか行く気になれないよ、行ってみれば髪の毛の白いひ

とばかり、こういうのを見るだけでもいやだよと。

③ 今、普通のグループは殆ど高齢者の集団となっています。フォークダンスが下降線をたどっていることに不満もあります。こういう文句に対して解決方法を提示できるひとは一人もいません。今ではリーダーシップをとった人達がこれを直そうというにはもう年をとり過ぎました。

ジョン氏は講演の最後にこういってむすんでいます。「カルフォルニアで今おこっている問題は、日本で皆さんがこれから20年25年たった時に同じ問題にぶつかるはずです。これはもう確かです。」

そして、ジョン氏の講演から25年を経た現在、日本におけるフォークダンス界は当時ジョン氏が予見したまさにその通りになっていましているのです。

（次号に続く）

第7回連載コラム（第3話）

相談役　辻田満

第7回目となる連載コラムは第4話シリーズにわたって「スクエアダンス愛好者の高齢化対応」について書きます。第3話では「10年後の日本のスクエアダンス事情」、「これからの10年間をどうすべきか」についてです。

５．10年後の日本のスクエアダンス事情

ジョン氏の講演内容はフォークダンスをスクエアダンスに置き換えても全く通じる内容ではないでしょうか。日本は今まさにこの素晴らしいスクエアダンスというレクリエーションが急速な高齢化の波に飲み込まれてしまいそうな存亡の危機に差し掛かっているといってよい状況です。本場、アメリカではスクエアダンス人口はピーク時には35万人いたといわれていますが現在はその1/5～1/7程度まで減少しその年齢構成は老人ばかりとなってしまいました。

このまま日本のスクエアダンス界も何もしなければ確実にアメリカと同様の衰退した状態になるでしょう。現在の愛好者の年齢構成を10年後にシフトすると愛好者の大多数は70歳代、80歳代となります。現在すでに踊っている70歳代の方は健康であれば10年後に80歳代になっても継続は可能かもしれませんがそれ以上の継続はないでしょう。このままでは確実に日本のスクエアダンス界は衰退の道を辿る運命なのです。

このような危機的な状況が10年後に迫っているにもかかわらず現在の60歳代や70歳代の多くは10年以上のキャリアが大多数でダンスプログラムもPLUS以上を踊りパーティーにも参加してスクエアダンスを何の問題もなく満喫している状況であり各クラブにおいても特に会員の高齢化に配慮した対応は考えていないことなのです。各クラブのリーダーは「何も問題なく楽しんでいるのに何故愛好者の年齢を問題視するのかわからない」とまで言い切っている方がいるのです。

６．これからの10年をどうすべきか

今回の調査で、70歳以上の愛好者が急速に増加しており、それに対する特別の配慮が少ない実態が明らかとなりましたが、この結果から導き出される高齢化対応の重点課題は、高齢の愛好者（体力的、時間的にハンディを持つ者）がスクエアダンスを継続して楽しめる環境を整えること、及び高齢者が初心者として楽しくスクエアダンスを踊り始め

ることができる場を準備することも大切になってきます。愛好者を確保することが、普及を安定的･継続的に実施する組織の運営に不可欠と言えます。

いかなる状況下においてもスクエアダンス界を牽引していくには、組織が安定的・継続的に運営ができる基盤が必要です。組織運営は会費収入に依存している状況であり、今後高齢化による会員の減少が急激にあるとすれば、それは深刻な問題です。高齢化に伴う対策は、今後の組織運営で取り組むべき最重要課題になることでしょう。

日本スクエアダンス協会が創設された1980年から2005年に至る25年の間は一貫して成長期で、創設当初2000人程の会員は当時「会員1万人運動」の普及活動が功を奏して1万4千人に届くまでとなりました。しかし、2005年以降会員の伸びは鈍化し、2013年からは1万5千人を前に足踏み状態となりました。今回の調査結果を受けて、日本スクエアダンス協会は10年後を見据えた基本方針を掲げて取り組んで行くことが必要と考えます。調査結果から見えてくる重点課題を次号に列挙します。

（次号に続く）

第７回連載コラム（第４話）

相談役　辻田満

第７回目となる連載コラムは第４話シリーズにわたって「スクエアダンス愛好者の高齢化対応」について書きます。第 4 話は最終話で第３話の「これからの 10 年間をどうすべきか」のつづきと「おわりに」についてです。

●会員（愛好者）数を増やすための体験者 10 万人運動

体験者 10 万人を目指すことは、引き続き重要だと思われます。10 万人にいかに近づけるか、その対応策を考えていくことが必要です。体験会・体験教室の開催の推進に加えて、体験会・体験教室を初心者講習会につなげていく、各クラブの初心者講習会の実施をいかに進めるかも大事です。平成 30 年度の会員登録更新に当たって、初心者講習会を実施したとの報告があったクラブは、半数に満たないという現状を改め、全クラブが初心者講習会の必要性を認識することが求められています。（Ｓ協では、毎年度の新規登録者を 1,300～1,400 人とすることを目指しています。）

高齢者も参加しやすい事業にし、事業後の活動に配慮するとともに、中年層、若年層や学校における体験者増を図る努力が必要になります。

●次世代への継続方策の更なる強化

愛好者増、会員増という課題に対して、日本スクエアダンス協会の次世代育成小委員会では次の世代を担っていく青年愛好者の育成に取り組んでいます。この取り組みを更に強化していくため、将来のスクエアダンス界を託す青年（少年を含む）の育成に加え、近くスクエアダンス界を担う中堅世代（リーダー）の育成のタスクを設けるなど青年・中堅層の育成を推進することが大事です。　また、新しい人材を、専門委員会のメンバーや統括支部の役員あるいはコンベンションの実行委員等に充てることなどを通して、次世代を担う人材を育成し活躍の場を準備していくことも考えられます。

●70 歳代から始めた愛好者の組織的な支援

現在は 70 歳代の愛好者の大多数はキャリア 10 年以上のベテランが多く、またダンスプログラムも PLUS 以上が 70%

の技量をもちクラブとしても特別な配慮がされていない実情となっていますが、一方ではキャリアが 5 年未満の 70 歳以上の愛好者が 18%で、パーティーには 37%の方が全く参加していない状況にあります。これら方々への支援は各クラブにお任せすること難しいと考えられますので、日本スクエアダンス協会の事業として施策を考え、各統括支部（または県連）が支援していくことが適当と考えられます。また、アメリカでも、やっとBasicの大切さに気付いたようですが、日本においても、Basic を十分に楽しむことができる環境を創りたいものです。

●普及サポーターの育成強化

愛好者の高齢化と同様にコーラーも高齢化してきております。愛好者の半数が70歳代と同様にコーラーの半数が70歳代となっております。あと10年もすればベテランコーラーの半数近い方々がリタイアを余儀なくされます。しかしコーラーは即席には育ちません。そこでコーラーの不足を補う普及サポーターを育成しようと取り組みが始めました。普及サポーターはコーラーではありません。動作の説明を口頭でした後でコールの入った音源で踊って頂くいいわばインストラクターです。フォークダンサーが踊りの順序を伝えるようにコーラーに代わってダンサーが動作の説明をしてコールは音源を使って踊って頂きます。スクエアダンスの本質的な楽しさはコーラーのコールで踊る意外性と変化であることは十分に承知しておりこの楽しさを普及サポーターに求めるものではありません。あくまでも普及サポーターはスクエアダンス未体験者にスクエアダンスを音源を使って体験して頂き、スクエアダンスの楽しさを少しでも体験して頂くことを目的としております。普及サポーターが体験教室でスクエアダンスの楽しさを伝えてくれれば後はコーラーが初心者講習会で愛好者として育ててくれれば良いのです。普及サポーターは本当に入り口の楽しさを伝える伝道師で良いのです。今後、普及サポーターを愛好者の 20%の規模で育成することが必要と考えます。さらに、学校の先生（あるいは教員を養成する大学の学生）をサポーターにしていくことを考えてはどうでしょうか。

愛好者の高齢化対応に即効薬はありません。着実に上記に上げた策に取り組むことでその成果が出始めるのは早くても5年後10年後です。これらの課題に対処するにはこれからの10年は支部組織や県連組織との連携を強化し着実に施策を実施していくことが不可欠となります。現状の支部や県連組織は毎年、定例行事をこなしている状態であり、これだけでは10年後の危機を回避することはできません。

7．おわりに

日本フォークダンス連盟は1956年（昭和31年）にフォークダンス、日本民踊、ラウンドダンス、レクリエーションダンス、スクエアダンスの5種目の普及発展を目的に設立された組織です。高齢化に対する危機はこれら5種目に共通した問題です。今こそ5種目それぞれの個々組織が日本フォークダンス連盟の存在意義を再認識して日本フォークダンス連盟と力を合わせて高齢化対応の課題可決に取り組むべき時期であると考えます。

おわりに当たって、「スクエアダンス愛好者の高齢化」対応について厳しい現実を述べてきましたが、一方ではこれからの私たちの取り組みは国の施策である健康長寿社会の実現に向けての明らかな貢献であり、私たち日本フォークダンス連盟、日本スクエアダンス協会の公益法人としての一員として社会的役割を果たす絶好のチャンスであることに言及しておきたいと思います。

（第7回連載コラムはこれで終了です）